ひろしまジュニア国際フォーラム　参加報告書

篠原　諒

今回で二度目となるフォーラムの参加となりました。前回のフォーラムは初めてのことだったので、新たな観点から学ぶことが多くありました。今回は前回参加した時と比較して、気付く部分が多かったように感じます。いずれにしろ、この様な機会を再び与えられたことに対し、心より感謝致します。

私が、Y7に初めて参加した時は日本を含め、７カ国の同世代の若者と交流する事ができました。その中で、英語を通じて様々なことを語り、考え方の相違や一つのことに対しても感じ方の違いがあることを実感しました。

今回のフォーラムでも、アジア諸国からたくさんの参加者が集い、会場では様々な言語を耳にすることができました。自分のグループでもアジア諸国からの代表者が集まり、休憩中は日本語、中国語、フィリピン語、英語など様々な言語が飛び交い、活気にあふれていました。この様な環境の中に、自分が居れたことをなによりも嬉しく思います。

ひろしまジュニア国足フォーラムを通じて、自分が最も感じたことは“英語”に対する自分の姿勢が変わっていっているということでした。休憩中は自国の言語で話していても、いざ本番となるとディスカッション中は熱く英語で意見が交わされました。意思疎通の手段として、文化の垣根を越えて英語が使われていることに、「英語」の持つ力強さを始めて感じました。これまで自分が育ってきた環境は英語圏だったので、英語は当たり前のように話していました。また、Y7に参加した時も、参加者はほぼ英語圏だったため、全員が当然のように英語を話していました。もちろん、休憩中も今回の様に多言語が飛び交っていることはなく、またそれが当然のものだと感じていました。今回このフォーラムに参加することによって、アジア圏では様々な言語が話されている中で、英語はやはり世界共通言語であることを、実感し再確認する事ができました。

フォーラムの中では「英語」ですべての討論を行っていきます。そうした活動を通じて、英語は国際的な社会を支えることにおいて重要な役割を担っていることにも気づくことができました。英語を通じて、世界がつながっていっていることを自分のグループの中で感じることもできました。

そして、もう一つ思ったことは英語でコミュニケーションをとっていく上で、には絶対的な正解はない、ということです。英語は、より高度な会話を求めようとすると、意図的に難しい単語や言い回しをしたり、抽象的な単語を意識的に使いがちになってしまう、と自分は思っています。しかし、そうしたことにとらわれ過ぎてしまうと自分の本意が伝わらず、いくら上手にしゃべっているように聞こえようが意味がない、と痛感しました。今回　フォーラムに参加している国々はアジア圏が多く、英語でコミュニケーションをとっていく中で、国によって発音やアクセントも非常にバラエティーに富んでいたと感じました。それでも「英語」を通じて「伝えたい」という思いは存分に感じることができ、多くの議論を展開する事も出来ました。逆に細かく気にしすぎて相手の頭に？が浮かぶような英語を使って会話するよりも、“伝わること”を最も優先し話す英語の方が魅力的だし、何よりも人とのつながりが感じられるのだと気付くこともできました。

こうした国際的なフォーラムに参加して、毎回思うことは、核問題は一朝一夕では解決することができるような問題ではないということ。日に日に解決に向けて国際社会は前進しようとしていますが、このようなイベントの世界各国から若者が集い、様々な観点から語り合うことができる。これこそが、問題解決に向けての大きな役割を果たしていると感じています。自分たちと同世代の若者たちが核軍縮に向けて取り組むためには、前の世代から積み上げてきた知識や事実を正しく知り、そしてそれを的確に、確実に伝えなければ、さらなる一歩を踏み進めることができません。

被爆地“ヒロシマ”で暮らしている私たちは、ヒロシマの事実を知るのみでなく、国際社会にも目を向け、できるだけ多くの世界中の人々とコミュニケーションをとり、誰もが平等で平和な世界で暮らしていけるように努めていかなければなりません。そういった意味でも今回のフォーラムは非常に大きなものとなりました。

最後に、今回のフォーラムの運営に携わってくださった職員の皆様、そしてフォーラムを通じて出会えたすべての参加者の皆さんに3日間素晴らしい体験をさせてもらったこと、心より感謝します。